学際的・国際的であることに関する私見

小川園子
人間総合科学研究科教授

前置き

自分では意識していないが、私の話は前置きなしに始まることが多いらしい。が、ここでは、本論のテーマにも直接関係する私の研究者としての略歴を中心に少々長い前置きを述べる。私の経歴は、①人間学類1期生として筑波大学に入学、心理学を専攻して卒業、②博士課程心理学研究科比較心理学専攻に入学・休学（後に退学）、③コネチカット大学大学院、Dept. Biobehavioral Sciences（USA）に入学・Ph.D.（Neuroscience）取得、④ロックフェラー大学、Lab. Neurobiology and Behavior（USA）で Postdoctral Associate、Assistant Professor、Associate Professor を経験、⑤2004年10月より、感性認知脳科学専攻に所属。この間、一貫して、行動の神経内分泌学的基礎、つまり、ホルモンが脳神経系のどの部位にどのように働いて行動（主に情動・社会行動）を制御・変容させるかについての研究を進めてきた。要約すれば、基礎教育を日本で受けた後、20数年、つまり研究者としてのキャリアのほとんど全部をアメリカ（大部分はニューヨーク）で過ごし、日本の、しかも出身校の大学に戻ってきたということである。従って、日本の大学の研究教育組織や一般的な社会通念・慣例については未だ無知であることが多い。また、筑波大学の組織の実体の詳細についても現在、知識を獲得中なので、具体的な提言をできるレベルには達していない。しかし、20年の空白期間を置いて、同じ組織を見直すことができるということは私の強みである。そこで、よそ者としての私自身の直観が鈍化する前に、常々思うこと・感じることをまとめて述べることには意味があるかと思い、執筆依頼をお受けした次第である。

“筑波大学の特色”

学際的教育・研究を推進し、国際性を重

視する大学というのが、開学当初から繰り返し提唱されてきた“筑波大学の特色”である。私自身が筑波大学人間学類を選んだのは、東京教育大学の心理学科がその多様性と大学院教育の充実度において卓越していたということが最大の理由であり、大学受験年度が第二学群関係学科の筑波への移転の年に当たっていたからである。しかし、当時、盛んに宣伝されていた“筑波大学の特色”に魅かれたことも否定はできない。そして入学後には当然、この“筑波大学の特色”を何度も聞かされて育った。詳細はここでは繰り返さないが、当時から、この特色の推進と整合性のあるカリキュラムや制度が存在したのは事実である。さらに、私にとっての20年の筑波空白期間にも、この特色をより強固にするために、色々、努力が重ねられてきたのだろうと思う。確かに、本誌のバックナンバーを見ても学内でその実態が検証され、改革が議論されてきたのがわかる。それでもやはり、現在の筑波大学において、一教員として学際的研究・教育を進め、さらに常に国際的な態勢の研究室を維持していくのは、非常に困難であると感じている。感じつつも、何とか私の考える学際的・国際的である状況を作り出すために、現在試行錯誤を重ねているところである。

私の考える学際性・国際性

最初に述べたように、私個人は、その質がどのように評価されるかはともかくとして、比較的学際的・国際的といえる状況で、研究者としてのキャリアを積み上げてきた。私が専門とする神経科学は、その成り立ちからして、極めて学際的な性格をもっている。現在では、世界各国から約2万人が年大会に参加するほどまでに発展した北米神経科学会は、もともとは数百人の心理学、生物学、生化学、薬理学、基礎医学諸領域、臨床医学などの専門家が集まって作られたものである。そして、その一分野である行動神経内分泌学でも、これらのそれぞれ異なる分野でのトレーニングを受けた研究者が活躍している。私の共同研究者のうち、学部で心理学を専攻した人は私の他にも一人いるが、大学院レベルでは、医科学（解剖学、ウイルス学、内分泌学、生理学など）、生物学、そして神経化学などで、自分を含めて心理学専攻はいない。また、最近数年間は、私もNIHのグラントのサポートを受けて、自分自身のグループを作って研究を進めてきたが、その構成員（ポストドクトラル研究員、学生、テクニシャン、インターンシップの高校生）や共同研究者の“出身”をみると次の様になる。日本、ギリシャ、ウクライナ、アメリカ、カナダ、フィリピン、中国、ロシア、インド、ベトナム、台湾、韓国、

ブラジル、イタリア、キプロス、キューバ、メキシコ、ペルー、コロンビア、ノルウェー、ドイツ、スウェーデン、等々（思いつくまま順不同）。つまり、10人集まった研究ディスカッションテーブルで、アメリカ生まれは0人せいぜい1人とか、両親との会話では英語を使わない人ばかり、ということが日常的に起きていた。ただ、これは、改めて考えてみて、初めて意識することであって、私が研究や学生指導を進めるにあたっては、なんら障害にはならなかった。

単に色々な国籍の人間が集まっていることが国際的というつもりは毛頭ない。また、多領域の研究者が同じ組織にいることだけで、学際性が生まれるわけでもない。ある個人が国際的であるということは「英語での会話を通して、相手の論理を理解し、自分の考えを論理的に相手に伝えることができること」につきると私は考える。あえて、“会話”でといったのは、Writingは言うに及ばずということで、会話だけという意味ではもちろんない。完璧な発音で日常会話ができても、あるいは、母国語ですばらしい論理を展開できても、また、英語以外の言語も、それだけでは国際的であるかどうかという観点では、全く無意味である。もちろん、研究領域によっては、英語以外の言語が必須であろうが、その場合にも、最終的には英語で研究成果を伝え、討論できなければ、国際的にはならない。学際的であるということも、同様に、他領域の人と論理的に議論できるか、その上で、1＋1以上の成果を出せるかということにかかっているように思う。どちらの場合にも、異なるものに対する関心・好奇心を持ち、理解しようとする姿勢、そして違いは違いとして認識した上で、前に進むための接点を常に見いだしていける資質こそがその基本であろう。そして、ある組織が国際的・学際的であるということは、このような資質を持った人間が集まって、物事（大学の場合はもちろん教育・研究）をスムーズになし得るということである。

筑波大学がより学際的・国際的であることを目指すためには…

本文での私の結論を先に言ってしまうと、現在の筑波大学において、より一層の学際性と国際性を追求していく上で最も重要なのは、大学院教育と分野によってはそれに続くポストドクトラルプログラムの充実であると考える。（だからといって、その基礎としての学群教育を軽視しているわけではなく、学群教育にも、大学院教育の充実が益となっても害になることはないはずである。）私個人の経験からみて、日米での大学院教育の違いが、日本人（厳密に言えば、日本で大学・大学院教育を受けた研究者）

の多くが、ポストドクトラルレベルでアメリカに行っても、直ぐには学際性と国際性を持った研究者として多国籍研究者グループの中で真価を発揮し得ないことの根源にあるように思う。

(a) 学際的研究を促す大学院教育

私は、大学では心理学を専攻したが、卒論、大学院での研究を通して、行動の基礎となる神経化学、神経解剖や、神経内分泌についてもっと知りたくなった。そして、大学院半ばで、これらを統合した大学院教育を目指していたコネチカット大学大学院のBiobehavioral Sciencesというプログラムに編入学した。当時は、前述の北米神経科学会が急速に発展し始めた時期にあたり、大学でもそれに見合った領域横断的教育・研究プログラムが次々に立ち上がろうとしていた。学生として一番嬉しかったのは、神経化学、神経解剖、神経内分泌、分子生物学などの大学院レベルの講義や実験のクラスがきちんとオーガナイズされて開講されていたことである。アメリカの大学出身者でも学部での専攻はまちまちであり、それぞれが、自分に足りない科目やこれから学びたい科目を自由に履修できるようになっている。また、ある科目の基礎を全く履修していなければ、これも、きちんとレベル（入門・上級など）を設定して開講されている学部の講義をまず履修することもできる。従って、学生は、自分の専門ばかりでなくその周辺領域の正確な知識を獲得し、研究手法の違いなどについても理解を深めることができる。このような大学院教育が、後に、プロフェショナルな研究者として新しい学問分野の創設や、分野横断的な研究プロジェクトを推進していく原動力になっているのではないかと私は考える。もちろん、このようなことが、すべての領域にあてはまるとは思わないが、少なくとも、学際的であることを目指すには、こういう基盤作りが必要であると思う。

(b) 国際性を磨く大学院教育

インターネットがあり、インターナショナル航空運賃が安くなり、ヴァーチャルであれ現実であれ、いわゆる国際交流を行うこと自体は容易くなった。だからこそ、その質が問題となるのだ。現在私は、前に述べた、「英語での会話を通して、相手の論理を理解し、自分の考えを論理的に相手に伝えることができること」を学生にどう身につけさせたらいいのかについて真剣に悩んでいる。当然のことながら、この目標のためには、まず、母国語で論理的に思考し、文章化できる能力が備わっている必要がある。現在の大学院レベルでは、そこのところも、手取り足取り教育していかなくてはならないのが現状かもしれない。だが、問題は、母国語で論理的に思考し、文章化で

きる能力が備わっていることが、必ずしも、英語でのそれを保証するものではないということだ。日本語を英語に“訳した”のでは、多くの場合、論理は明確には伝わらない。(これには言語学的な背景もあるように思うが、素人なので、ここでは触れない。)そうなると、やや極論だが、研究者養成を目指す大学院では、いっそのこと最初から英語で考え、文章化することを通して、論理の組み立ても訓練した方がいいのだろうか?

(c) 国際的研究をサポートする体制

最後に、筑波大学が真に国際的に開かれた大学を目指すなら、多国籍の大学院生、ポストドクトラル研究員そしてプロフェショナルレベルの研究者にとって、筑波大学に来て研究することが魅力的なものであるようにならねばならない。それを決めるのは、メンターあるいは共同研究者としての我々教員自身の質であることは言うまでもない。が、我々が多国籍研究グループを形成して円滑に研究・教育活動を進めるには、当然のことながら、大学の組織としてのサポートが不可欠である。日本の常識であっても、世界の常識でないことは多々ある。その辺りのことをきちんと理解し、組織や制度をタイミングを逃さず改革していけるかどうかが、真に国際的であるかどうかを決定するのではないかと考える。

終わりに

以上、私自身の経験を基にした、かなり偏った提言となったかもしれない。ただ、私自身は、一教員として学際的研究・教育を進めると同時に、海外の研究者、ポストドクトラル研究員などをできる限り多く受け入れて、教育・研究を行っていくつもりである。私にとっては、それが最も自然な研究室のあり方であり、研究・教育の進め方であるからである。そして私が真に望むのは、筑波大学においても学際的・国際的であることが特別な労力を要することではなく日常的で普通のことであるという状況が作られることである。もし、本文が、賛否いずれかであっても、学際性・国際性という“筑波大学の特色”の理想追求のための議論のきっかけとなれば幸いである。

注:他に適切な日本語が思い浮かばなかったので、文中、しばしば“多国籍”という表現を用いた。これは、パスポートに記載される国籍という意味で使ったのではもちろんない。異なる文化、制度の下で基礎教育を受けてきた研究者、学生の集まりという意味である。

(おがわ　そのこ/行動神経内分泌学)